大分縣保育會兒童愛護デーの講演

――醫學博士伊藤祐彥氏「育兒の方計」

六日午後一時より縣公會堂に開かれた兒童愛護デー講演會は純眞愛に滿たされた一般家庭婦人や父兄市内中學校職員及女師岩田各高等女學校生徒等の聽衆を以て場外に溢れるの盛況裡に開會を宣せられ山本女師範校長は滿場の拍手に迎へられて登壇兒童教育上に關し「子寶の育て方」の題下に學校と家庭との聯絡及兒童心裡の理解等最も熱烈に愛護に滿ちた講演があり次に福岡醫科大學教授醫學博士伊藤祐彥氏は滿場急霰の如き拍手に迎へられて登壇「育兒方針」の題下に大要左の如き講演があつた。

人口を殖すが宜しいか、餘り殖やさぬが宜しいかと云ふ問題は其の國其の時に依つて講ずべき問題であつて佛蘭西では世界大戰前迄は產兒制限を行つて人口を殖やさぬ方針を採つて居たが戰爭後は其の方針を變ぜしめて人口の增殖を計り獨逸の如きも極端な程人口を殖やす方針を採つて居る之れは戰爭が生んだ結果でもあるが時に依つて斯の如く變化がある翻つて我國は何うかと云ふに大體消極と積極との二說がある、消極說によれば、人口は其の國の廣狹及食糧生產の如何によつて產兒に制限を附せなければならぬ、故に我國の如く食糧品の不足する國に於ては餘り殖やさぬが宜しいと云ふ說であつて又積極說によれば我國は朝鮮に臺灣に支那滿洲に發展の餘地無限であつて化學の進步する今日食糧品には何等不安を感ぜないから現在の三倍四倍でも殖やして宜しいと云ふのであるが實際に於ては此の積極說を採つて益人口を殖やす方針を採つて居るから、先づ安心して、殖やして差支ない其所で何ういふ方法が最も育兒方に適ふかと云ふことが問題になる、舊敎育でいふと德育と智育であつたが現代敎育方からいふと「精神上と體育上」の二つになるが精神上の敎育から云ふと、放任敎育と干涉敎育とになる放任に失するも不可、干涉に失するも不可要は其の長所短所をよく理解して長所に就ては餘り干涉せないことにし短所に就ては干涉して矯め直すと云ふ方針を採ることが肝要である、故に同じ惡戲にしても長所と短所を鑑別すると云ふことが必要である、此れに就ては斯云うふ例がある。或る子供が襖と云はず障子と云はず畫のいたずら書をするので畫に對する長所ありと

して白紙を限りなく與へて畫を描かしめた所が名ある畫伯になつたと云ふことである、斯くの如く同じ惡戯をするにしても其の長所と見る所は引き延ばすことにせなければならぬ其の反對に短所と見る所は干渉して矯正することが必要である。

體育上に就ても精神教育に於けるが如く放任主義と干渉主義との二主義があるがこれは何れも絶對にといふことは出來ない卽ちその子供の體質如何によつて定まる問題である卽ち放任して置いても故障なく育つ子供もあれば干渉して大事にしても弱い子供もある、身體に故障のない子供は或る程度迄は放任主義を採るも差支ないが弱々しい子供は干渉して日常の起居飲食物迄注意を仕なければならぬ、所が下級勞働者と中流以上の家庭とを比較すれば中流以上の家庭に限つて病質の子供が多いようである、よく云ふことであるが、大事にするから、子供が弱いと云ふが之れはよく調査して見れば甚だ誤つた觀察であつて大事にするから弱くなるのではなくて、弱いから大事にすることになつて居る、無理解に弱い子供を放任主義によつて育つるが如きは甚だ危險である此點は深く心得べき事である。元來子供の弱いと云ふことに二通りある一は滲質性體質二は胸腺淋巴腺で滲質性體質と云ふのは幼兒の時分より頭部頸部に吹出物が出來たり腰部に痒がりが來たり爛れが出來たりするものであつて胸腺淋巴腺と云ふのは一寸としたことでも感冒に罹り易く赤痢や虎列刺に罹り易い素質を有する體質の子供である斯くの如き體質を有する子供はよく醫師の診察を受けて干渉的に出でなければならぬ。

元來體質は年齡に依つて變化するものであつて斯くの如き體質を有する子供も十三四の頃に至れば精神上の轉換と共に體質も變換して右等の疾病も無くなつて健康體となるものであるから、この年齡迄の注意は最も肝要である、彼のよく言ふ子供の內は弱かつたが大きくなつて壯健になつたと云ふは此理によるのだ右等の理解を以て愛兒の健康を計り精神上の教育と共に相俟つて完全な人を造り上げることにせなければならぬ。